

BOOK Review

在宅医療カレッジ 地域共生社会を支える多職種の学び21講

評者 藤沼 康樹 医療福祉生協連家庭医療学開発センター

現代はフィルターバブルの時代である。インターネットの発達と検索テクノロジーの進歩により、知りたいことがあれば「何でも」調べられるようになった。何でも検索できるということは、実は「知りたいこと」以外の情報には接する機会が減っていると言えるだろう。自身が見たくない情報からは「居心地の良い泡に包まれたように遮断」されたまま暮らしているわけである。そんな中、かつて幅広い情報源であった雑誌、特に総合誌と呼ばれるメディアは、衰退の一途をたどっている。評者が雑誌を購入する目的は特定の（お目当ての）記事であることが多かったが、パラパラとめくっていると、これまでまったく触れる機会のなかった情報や世界に出会うことがあり、新しい知への出会いが生じることがあった。それが魅力でもあった。かつての雑誌編集者は、自身の持つ哲学や思想、考え方を、多様な記事に徹底させていたように思う。

さて、わが国の重要な課題である在宅医療の世界で現在、現場での実践と社会への提言を両立させており、最も注目すべきプレイヤーの一人である佐々木淳医師の編集による本書は、そうしたかつての雑誌・総合誌の最良の部分——読者がこれまで知らなかった世界やフィールドと出会える場を演出する力学を持っている。つまり、ある特定の専門領域のノウハウを提供するというつくりではなく、認知症ケア、高齢者の介護技術といった専門医が疎いジャンルから、哲学や倫理のテーマに踏み込む当事者の語りなどまで包摂したバラエティに富んだ講師による多種多様なテーマに出会うことができる。

とすると、編者がどのようなコンセプトに基づき、この本を編集したのかということに興味が出たのだが、それは編者自身が「はじめに」で述べているように、在宅医療にかかわる多職種と当事者たちが、学びのモチベーションを得て、成人教育・学習のキーである「自己決定型学習」がドライブされることをめざしているところにある。

ここで留意すべきなのは、フィルターバブルの時代においては、自分で課題設定し、自分で調べて学ぶという自己決定型学習がかえって学びを狭める可能性があるということだと思う。つまり、そもそも問題設定が自らの関心事のみに制限されやすくなっている時代においては、思いもよらぬ問題や話題との「遭遇」が生じにくくなっているのではないかということである。編者が本書を「カレッジ＝幅広い学問を提供する小さな大学」と名付けていることが非常に興味深い。つまり、編者から読者（学び手）へ、従来まで関心のないテーマであったり名前を知らない講師であったりしたとしても、それでもぜひ触れてほしい、知ってほしいという願いが感じられ、そして、その好奇心こそ多職種連携の基盤となる共通言語になり得るという通底するメッセージが、この「カレッジ」というタイトルに込められていると思うのだ。

本書を手にとった方には当面の関心事の記事だけでなく、ぜひ他領域の記事もパラパラと読んでほしい。きっと、あなたにとって新しい、未来につながる「問い」や「課題」に出会うことができると思う。



佐々木 淳 編

A5判/264頁/2018年/定価(本体2,000円+税)/ISBN978-4-260-03823-2/医学書院刊